View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

京城帝国大学における近代韓国儒教研究の展開 [全文の要約]

著者	李 暁辰
発行年	2015-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第582号
URL	http://doi.org/10.32286/00000256

平成27年3月期
関西大学審査学位論文

博士論文要旨

東アジア文化研究科　文化交渉学専修
12D2202　李暁辰

京城帝国大学における近代韓国儒教研究の展開

本論文は、京城帝国大学を中心として、近代日韓学術における韓国儒教研究の展開を考察したものである。中でも京城帝国大学の朝鮮文学講座を担当した高橋亨、支那哲学講座を担当した藤塚鄰・阿部吉雄を中心にすえ、彼らが行なった研究は何であり、韓国儒教をどのように認識していたかについて比較・分析した。そして、京城帝国大学で行われた韓国儒教研究の道筋とその内容を究明し、近代韓国学術界との連関関係を明らかにした。

本論文では、大きく二つの部に分けて論証を行なった。第一部「学制篇」では、植民地帝国大学ゆえの制度と特徴、そして植民地帝国大学として有していた研究使命を解明した。また、京城帝国大学で行なわれた韓国儒教関連講義と研究の様相をさまざまな角度から考察し、それが卒業者にどのような影響を与えたかを検討した。最後に、京城帝国大学の韓国儒教研究を築いていく過程で、どのような学術的活動があったのかを探った。

第一章「植民地帝国大学と近代学術」では、京城帝国大学と台北帝国大学の文科系を中心に、植民地大学としての特殊性について論じた。京城帝国大学は、植民地大学および国策研究機関として日本内地の帝国大学とは異なる特有な性質を有する機関であり、「朝鮮学」や「南洋学」など新しい研究領域の研究が行なわれた。両帝国大学の教員は大部分日本から招聘された。これは、日本の学術・制度・カリキュラムの導入を意味するものであった。特に教員構成においては、京城帝国大学は総長服部宇之吉を筆頭とする東京帝国大学の人脈が中心であり、台北帝国大学は総長幣原坦および文政学部長藤田豊八の人脈による東京・京都帝国大学出身で成り立っていた。

第二章「京城帝国大学における朝鮮儒教関連講座の再構成」では、京城帝国大学の「韓国学」の一現象として韓国儒教研究が存在したことを、教員・カリキュラム・学生の三項目につき検討し、論証した。本章では、これまで注目されてこなかった京城帝国大学における韓国儒教研究の実体を、高橋亨、藤塚鄰、阿部吉雄の活動とその授業カリキュラムを検討することで確認した。さらに、京城帝国大学で韓国儒教研究が行われる際に、直接的・間接的に携わった人物を紹介し、服部宇之吉―宇野哲人―藤塚鄰と繋がる人脈により加藤常賢や阿部吉雄など東大出身者の京城帝国大学に赴任する過程を明らかにした。その結果、支那哲学講座のカリキュラムと学問方法は、当時の東京帝大における新たな学問の風潮と緊密にかかわるものとなった。一方、学生たちは伝統的な漢学にもとづきつつ、京城帝国大学における韓国儒教関連講義を受講し、近代的方法論を身につけた。しかも彼らは、当時の韓国側の儒教研究者と交流し、自分の研究を築いていった。

第三章「京城帝国大学における韓国儒教研究活動」では、第二章で挙げた韓国儒教研究者たちが、具体的にどのような活動を行なったかを、朝鮮総督府との関係および当時日韓学術界における学術活動に中心をすえて検討した。朝鮮総督府は、成均館を縮小した「経

学院」を中心として儒教利用政策を実施し、京城帝国大学は経学院で果たせなかった教育機能と研究・学術機能の役割が付与されるようになった。一方、京城帝国大学の韓国儒教研究者ら、とりわけ高橋、藤塚、阿部は、雑誌『朝鮮』『朝鮮及満州』『文教の朝鮮』『青丘学叢』などでも学術活動を行なった。さらに彼らは、斯文会・東方文化学院・漢学会などの日本内地の学術機関においても研究成果を発信した。また、彼らの人脈を通じて、日本の学者たちも韓国を訪ね、学術活動と交流を行なったのである。これらのことから、日本と韓国の学術はそれぞれ離れて存在していたのではなく、直接・間接的な関連性を持っていたことが指摘できる。

第二部「学術篇」では、京城帝国大学の韓国儒教研究者の高橋亨、藤塚鄰、阿部吉雄に焦点を当てて彼らの学問を分析し、日韓両国の研究者の韓国儒教に対する認識の差と相互的影響関係について考察した。

第一章「高橋亨の韓国儒教研究」では、高橋の韓国学研究および韓国儒教研究を総合的に検討し、その意義と限界を考察した。本章では、高橋の韓国儒教が時代によって変化していくことに着目し、その内在的・外在的要因を考察した。その結果、一、植民地官僚としての立場から韓国儒教を非難し、それを韓国人の「従属性」と「固着性」につなげようとした時期（渡韓後～1920 年代）、二、韓国学研究が充実していく雰囲気の下で、高橋自身も韓国文学研究を行なう過程でそれまで無視していた韓国伝統文化を再認識するという内面的変化が起きた時期（1930 年代）、三、「皇道儒教」を提唱し、皇民化政策のために韓国儒教を利用しようと試みた時期（1940 代～終戦）、とその時期による変化を明らかにした。以上からわかるように、外在的には日本人官僚としての義務と観念が、内在的には韓国学に対する認識が互いに作用しながら高橋の韓国学は構築されていたのである。

第二章「藤塚鄰の韓国儒教研究」では、藤塚の金正喜研究を中心にすえ、彼の韓国儒教研究と認識を検討し、彼の行なった研究は何であったかを考察した。藤塚は、膨大な資料の駆使と清朝考証学の知識を基盤として、金正喜が清朝経学上における重要人物であることを浮き彫りにした。藤塚の著書『清朝文化東伝の研究』は、それまで研究されてこなかった金正喜および北学派の存在と意義を解明したものであった。このような藤塚の研究は、高橋などによって性理学一辺倒とされてきた朝鮮儒教の展開に、清朝考証学という新たな要素をつけ加える結果をもたらしたといえる。さらに、彼の研究は当時韓国側の実学研究者にも刺激を与え、互いに金正喜のイメージを創り上げることになった。ただ、藤塚も基本的に朱子学を否定的に認識したことや、日本の儒教とのかかわりについて誇張的論旨が見られるといった問題があることも指摘できる。それにもかかわらず、藤塚の『清朝文化東伝の研究』は、18・19 世紀日中韓の学術交流・交渉史の先駆的研究であり、それまで知られなかった韓国後期儒教史の重要な一面を解明した研究であるといえよう。

第三章「阿部吉雄の韓国儒教研究」では、阿部の李退渓研究を中心として、彼の韓国儒教研究と認識を検討し、その意義と限界を考察した。阿部が京城帝国大学の支那哲学講座に赴任し、李退渓の研究に専念したのは、すでに藤塚によって支那哲学講座が韓国儒教研究を含む講座とされていたからであった。阿部の李退渓と日本朱子学者の影響関係に関す

る研究は、高橋の李退渓研究からそのテーマを、藤塚の金正喜研究から学術交渉という視点と方法論を、それぞれ受け継いだ結果であるといえよう。しかし、大東亜戦争が始まる1940 年代になると、李退渓は阿部によってその教学思想が強調され、闇斎から元田永孚に至る「尊皇論」を裏付ける存在として描かれた。しかし戦後の研究では、そのような発言は言及されず、日韓朱子学交流の中心人物としての李退渓像を代わりに強調するようになった。これら戦前における阿部の韓国儒教研究は、植民地帝国大学の教員として要求された研究とその限界を鮮明に表しているように思われる。

第四章「韓国儒教理解の乖離：京城帝国大学の韓国儒教研究と韓国儒教界」では、韓国儒教をめぐる多様な認識を探り、当時日本側と韓国側の韓国儒教研究が互いに及ぼした影響について、第一節では、高橋亨と張志淵の「紙上論争」を取り上げ、両者の間の認識の差とその理由を探った。二人の論争を通して儒教をめぐる近代日韓の認識とその相違が浮き彫りになったといえよう。第二節では、高橋と藤塚の韓国儒教認識の差について検討した。高橋は渡韓以来一貫して韓国儒教は朱子学にほかならないと主張していた。これに対し、藤塚が高橋のような考えに疑問を抱き、そして金正喜の存在から清朝考証学の学風が朝鮮後期に存在していたことを究明し、高橋の韓国儒教認識の問題点を明らかにしたのである。第三節では、京城帝国大学の韓国儒教研究と朝鮮学運動の影響関係について検討した。1930 年代、安在鴻、鄭寅普などの韓国の知識人によって、丁若傭とその思想が韓国における「実学」として脚光を浴びるようになった。これらによって韓国儒教の新局面が次々と明らかになり、高橋もこのような学術的成果を認知していたが、金正喜や丁若傭について言及しつつも、それを例外とする立場を維持したのである。

補章「戦後の歩み」では、京城帝国大学韓国儒教研究者の戦後の活動について論じた。まず、高橋を中心として天理大学の朝鮮学会とその活動を分析し、戦後日本における韓国学の一出発点の在り方を探った。最後に、藤塚が集めた資料の価値と行方について、韓国果川市に寄贈された書物とハーバード燕京図書館の「藤塚コレックション」を中心に検討、紹介した。

京城帝国大学における韓国儒教研究は、意図した「体制」ではなく個人の個別研究が作り上げた「現象」として存在したのであって、体系的・計画的に研究が行なわれたわけではなかった。彼らの研究がまとまったシリーズないしは書物として出版されることもなかった。しかし、高橋、藤塚、阿部が行なった研究は、韓国儒教研究の成果を発信し、研究を蓄積することによって、韓国儒教研究の新たな近代的学術性を作り出したのである。

近代日本人学者によって行なわれた韓国儒教研究が、「皇道儒学」など強い帝国アカデミズムの特徴も含んでいた点は無視できない事実である。しかし、高橋、藤塚、阿部によって進められ、日韓両国の儒教研究者の協力と衝突の上に成り立った京城帝国大学の韓国儒教研究は、その研究の量と質、方法論、残した資料と影響などの側面から、近代韓国儒教研究史の重要な一駒になったといえる。